③ロチ（右）、ピエール（左）とお兼
exotomanies.blogspot.com

②台紙（裏）のメダルデザイン
明治32年８月16日　個人蔵

（表）上野彦馬夫妻

①写真台紙（裏）　明治15年ごろ
個人蔵

（表）上野彦馬の自撮像

⑲　最盛期の撮影局

上野彦馬とその時代

姫野順一

明治10～20年代は上野彦馬撮影局の最盛期であった。彦馬は明治10（1877）年、東京の上野公園で開催された第1回内国勧業博覧会に出品して風紋賞と有功賞を受け、これを伝達する内海忠勝長崎県令から「其右ニ出ルモノナシ実ニ無比ノ美術ト云フベシ」と称賛された。

彦馬は第2回（明治14年）にも出品して入賞メダルを獲得。第3回（明治23年）で有功賞を、さらにシカゴ・コロンブス記念世界博覧会（明治26年）でも受賞した。そのたびに、写真館の写真台紙のデザインは写真①から写真②のように、受賞メダルの数が増加していった。

彦馬が明治15（1882）年に「ビードロの家」とはやされたガラス天井の大スタジオを新築すると、市民や旅行者、外国人客が前にもまして殺到した。その賑わいは明治18（1885）年7月29日に写真館を訪れた、小説「お菊さん」で知られるフランスの小説家ピエール・ロチが書き残している。

「写真屋は、英国の水兵たちでごったがえしている。撮影の順番を彼らに譲らなくてはならぬ。大層な賑わいであった。郊外の快適な区域にあるこの写真屋は、緑の山から流れ落ちる急流のほとり、満開の大きな夾竹桃、細い竹、仏陀と狐神に囲まれ、人工滝の急流には御影石の反り橋がかかり、日本の婦人が大きな傘をさして、橋を渡りながら振り向く姿は扇の絵のような光景であった」（「ロチのニッポン日記」）

外国人も殺到 アジアに進出

写真③はその時、撮影されたロチの写真である。「一緒にポーズをとって、肖像写真を撮った」と後述された写真で、3人は目線を散らしポーズを決めている。小柄な男性がロチ、大柄な男性は部下で親友のピエール、小説ではイヴとして登場する。女性のお兼は、ロチと同棲する女主人公のお菊さんである。写真で見る限り小柄な美人だが、小説の中では人形、ムスメと表現され、性格も醜く描かれていた。

彦馬は明治20（1887）年に父俊之丞の雅号停車園を名乗り、撮影局の名前を「撮影處停車園」と変えた。最盛期の撮影料は小判（名刺大）が1円（現在の貨幣価値に換算すると3800円）、中判（手札大）2円（7600円）、四切り5円（1万9千円）、全紙10円（3万8千円）で、外国人はその2倍であった。撮影総収入は年に約1万5千円（5700万円）に上る。明治22（1889）年、彦馬は長男秀次郎に戸主を譲り隠居届を提出している。だが、上客の撮影は続け、写真の研究も怠らなかった。

明治24（1891）年4月27日、ロシアのニコライ皇太子が世界旅行の最後に長崎を訪問した。日本政府の命を受けた中野建明県知事の依頼と思われるが、彦馬は、長崎見物に出発する人力車上のニコライを撮影した（写真④）。

ニコライの前日の日記には「日本旅行の準備のために『お菊さん』を読み始めた」と記されている。ニコライは長崎の後に訪れた大津で警察官津田三蔵に斬りつけられて頭部に9センチ近くの傷を負った。その後、東京訪問は取りやめとなり帰国する。

彦馬は、明治20年代に入ってアジア各地に進出した。明治22（1889）年には自らウラジオストクに旅行して軍艦や要塞などを撮影し、翌23（1890）年に妻ムラの妹キクと結婚した弟子の渡瀬定太郎を支店長としてウラジオに進出した。その翌24年には鈴木忠親を派遣して上海支店（中国名「上野照相」）を設け、渡瀬の弟守太郎もここで働いた。さらに同年に妹コノの夫上野才造を支店長に任命し、香港支店を開設した（写真⑤）。

上野彦馬の写真館ネットワークは、日清戦争の直前には東アジアの拠点港に拡張していたのである。

（長崎外国語大特任教授）

＝随時掲載＝

④長崎見物に出かけるロシア皇太子ニコライ
「写真の開祖上野彦馬」より

（表）赤ちゃんの誕生記念

⑤上野照相香港支店の台紙（裏）
明治24～28年　個人蔵

長崎新聞 2025（令和7）年1月19日掲載